

鴨川ダム反対運動の住職

田中真澄さん死去

82歳

京都府が整備を計画した鴨川ダムに反対し、自然環境の保全を幅広い市民に訴えた京都市北区雲ヶ畑の志明院住職だった田中真澄（たなか・しんちょう）さんが8月5日、肺がんのため京都市内の病院で死去した。82歳。葬儀は家族で営んだ。喪主は次男で現住職の眞眞（りょうしん）さん。

1940年三重県生まれ。6歳で父が住職となった志明院に移った。立命館大在学中に休学し高野山で修行。67年に父の後を継ぎ同寺住職に就いた。

鴨川源流に位置する同寺で山と森を守る活動に取り組み、80年代後半に京都府が整備を目指した鴨川ダム計画への反対運動の中心を担った。鴨川清掃やオオサシシヨウオオの観察会と生息調査、コンサート、街頭署名などを通じて幅広い市民に働きかけた。府は90年に計画撤回を表明した。93年には自然保護団体や文化人とともに「鴨川の清

流を守る条例」の制定を求め、府鴨川条例につながっ

宗教界超え交流深め

鴨川ダム建設などに反対して「行動する和尚」と呼ばれた田中さんの原点は、20歳代のころにさかのぼるという。「仏教団体の狭い枠を離れて広く社会の人々と共に考える大切さを、双ヶ丘で学んだ」。志明院を訪ねた記者に、田中さんは語った。

伝統教団の眞言宗御室派に属していたが、総本山仁和寺が所有していた右京区の大ヶ丘にある国名勝の古墳丘が売却され、開発への懸念に田中さんは異を唱えて宗派を離脱し、単立寺院となった。社会的な論議を経て行政が土地の一部を買い取る形で現在の保存につながった。鴨川ダム反対はその延長だったという。「森の保全は川を守る生命線だと幅広い市民の共感を得ら

た。京都水と緑を守る連絡会元代表。国土交通省近畿地方整備局の専門家会議の淀川水系流域委員会委員も務めた。著書に「ダムと和尚」。

（河北健太郎、秋元太一）

れたことが、行政を突き動かした」と振り返った。

芸術家 学者 文筆家…

宗教界を超えて交流を深めた。境内で野外調査する自然科学研究者や学生と環境保全について語り合った。

「人間は自然に生かされているという仏教者の視点は、自然を研究している科学者の考えと一致した」と田中さんは本紙のインタビューで述べた。はるか下流の都心部の小学校の授業も快く受け入れ、「自然への感謝の気持ちを忘れてはいけない」と語りかけた。

眞澄さんの没後に住職を継いだ眞眞さん（50）は、毎朝の勤行で不動明王に供えるために行場の滝で水をくむ。「生まれたての水」と父が尊んだ清らかな谷水は枯れることはない。ヒノキの巨木にはモモンガやムササビの巣穴が見える。府職員技師として森林や生き物の保全に従事した経験がある。「すべての生きとし生くるものに仏性が宿る」。空海の教えをかみしめるようにつぶやいた眞眞住職は「豊かな自然を、先代以上に守っていく」と語った。



「人間は自然に生かされている」と清らかな水の保全を訴えた田中眞澄さん（2007年、京都市北区志明院）